



萱野れい子
Reiko
Kayano

<略歴>

- 1931 両親の仕事先である奥尻島に生まれ平取町二風谷で育つ
- 1951 萱野茂氏と結婚
- 1972 夫・萱野茂とともに二風谷アイヌ資料館を設立
- 1980 国立民族学博物館にアイヌ民族の民俗資料を 製作・納品する
- 1985 職業訓練指導員（織布科）取得
- 1994年まで、北海道ウタリ協会平取支部
（現平取アイヌ協会）機動職業訓練校織布科指導員
- 2007 アイヌ文化実践上級講座講師

<受賞歴>

- ・日胆地区ウタリ民芸制作技術コンクール大会 織物の部
第2位入賞 (1971)
- ・平取町教育文化功労賞受賞 (2004)
- ・アイヌ文化賞受賞 (2010)

“昔は木灰だけでやっていたんだけど、今は、それ（苛性ソーダ）を入れると早く煮えるので混ぜてやってます”

“ワシ、小さい頃母が早く亡くなったんで、こうゆう事もやること知らなかったし、だから嫁に来て初めてこういう事もやれるようになったんです。後は見よう見まねですね。上手にできないけどやってます”

“カエカ、カエカ。これ“カ”って言うんですけれど擦っているから“カエカ”って言うんです”

“昔はこういうやり方で、畑行く時は弁当入れて背負って歩くとか、色々使ったもんです。その使うものによって大きくしたり出来るんです。だからこんなに大きなもの作ったことありました”

“魚の皮で着物縫うのは最初大阪の民族学博物館から頼まれてやったことあるんですけど、皮、柔くすること覚えてきてウィーンまで行ったことあるんです。言葉は1つも分からないからね。結局わからなくて、ただ皮だけ買ってきてね、それで作った着物が今資料館にあります”

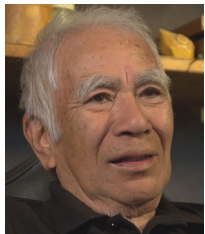
“資料館をあれして、そのおかげで私も仕事色々やらしてもらって大変だったです。二人とも若いから続けました”

“結婚も反対されてね、結婚したんですよ。村一番の貧乏人の家に行ったって苦勞するからって言われて。その当時は、やっぱり生活していくだけで精一杯ですからね。少しずつ働いて、子どもたちもいてお舅さんもいたしね。そのうち、資料館を建てる契約をして、資料館創るのにいろいろ作ったり、博物館からも頼まれるようになって、おかげで、いろんな事できたと思います。幸せに歳をとりました”

わざ

Hands and Hearts
vol.2





浦川 太八
Tahachi
Urakawa

<略歴>

- 1941 浦河に生まれる
- 1972 札幌市で木彫りを習う
- 1975 北海道開拓記念館の依頼により古いアイヌ民具を復元
- 1981 ホロベツ民芸を設立
- 2002 アイヌ工芸品展・英国スコットランド国立博物館所蔵
アイヌ民族工芸品複製(アイヌ文化財団主催)に参加
- 2017 森の名手・名人(加工部門)認定

<受賞歴>

- ・第18回北海道アイヌ民芸品コンクール一般民芸品部門
知事賞受賞(1985)
- ・第30回北海道アイヌ伝統工芸展伝統工芸品部門
知事賞受賞(1997)
- ・平成13年度アイヌ工芸作品コンテスト
優秀賞受賞(ホロベツ民芸)(2001)
- ・第36回北海道アイヌ伝統工芸展伝統工芸品部門
かでの賞受賞(2003)
- ・アイヌ文化奨励賞(個人)受賞(2008)

“どのマキリも、自分の手に合わせているんですよ。
これはもう、かなりの数シカを解体しているんですけどまだびくともしないですね”

“浦河町内で猟友会に入っているんですけど、アイヌで鉄砲持っているの僕だけです”

“これニカワなんです。これシカの爪からとったんです。
煮詰めると中からニカワの素が出てくるんです。それを煮詰めて漉して(使うんです)。
昔の人の話し聞くと、サケだとかマスの皮でもこうやってニカワ作ったって言うんですよ。乾いたら簡単にはとれないですね”

“基本は線彫りでしょうね。あと、鱗彫りを入れたり。殆どが、アイヌ文様って組み合わせですからね。
粗彫りするのには丸ノミ使ったりするけど、文様は殆どこの小刀一本です”

“習ったのは、開拓記念館(現北海道博物館)の地下の倉庫ですね。暇あるとあそこに遊びに行っては、マキリだとか民具だとか色々見せてもらって、それで勉強したんです。3・4年は通ったかな”

“いや、最初は失敗ばかりしていましたよ。でも、何回も失敗しているうちにこうすりゃ良いとか色々ありますから。木彫りを始めて10年ぐらい経ってから、まあまあ何とかこんなになったんですね”

“これからやりたいことは、川に行ったらサケ・マス獲ったり、今、僕は伝統文化を守るために許可をもらって川に行ったら堂々とサケ獲ってます”

“作ったものだけ残しておけば、僕みたいに昔の人の作ったものを見て勉強できるから、直接でなくても、何十年、何百年経った後に誰か見て、真似して作ってくれれば良いなと思って、品物だけは残しているんです”



岡田 育子
Ikuko
Okada

<略歴>

- 1949 白老に生まれる
- 1995 機動職業訓練織布科を受講する
- 1997 アイヌ文様刺繍サークル「フッチコラチ」を設立
- 2008 苫小牧市立博物館の刺繍講座において指導者としての役割を担う
- 2008 苫小牧市民サークル「ノンノの会(刺繍サークル)」の講師を務める
- 2008 白老町立緑丘小学校「緑塾(刺繍教室)」の講師を務める
- 2014 アイヌ工芸者技術研修事業(国立民族学博物館主催)に参加

<受賞歴>

- ・アイヌ工芸作品コンテスト 奨励賞受賞(2003-2005)
- ・第41回北海道アイヌ伝統工芸展 優秀賞受賞(2007)
- ・第44回北海道アイヌ伝統工芸展 優秀賞受賞(2010)
- ・第47回北海道アイヌ伝統工芸展 優秀賞受賞(2013)
- ・アイヌ文化奨励賞(個人)受賞(2014)

“結婚した時に、初めて作ったというのがあるんです。でも、それは、恥ずかしくて見せられるようなものじゃないんですけど、ホントに今でも夫は、私が最初に作った着物ということで、すごく大事にしてくれています”

“2年か3年くらい前に、大阪の民博(国立アイヌ民族学博物館)に行ったら、勉強してきたんです。昔のアイヌの人達ってというのは、ほんの少しの布も、大事に使っていたんだと思います。今、我々作っている時は、一反の布で全部を作りますので、これは幸せなことだなんて思ってますね”

“小さい時というか、昔のチセみたいところに住んでいまして、その感じは思い出すんですが、私の祖母の頃になってきますと普段の時はアイヌプリのようなことは、そんなにしていなかったですね”

“私が、こういうことをするようになってから、父は大変喜んでましたね。やっぱり、そういうの自分の子どもがやるっていうのすごく嬉しかったんだと思います”

“今に生きる私たちは何が残せるんだろうかと考えた時に、今まで作ってきた先祖さんの文様ばかりではなくて自分達のを残していきたいって、最近では考えるようになりました”

“まさか自分がこういうことやるとは思わなかったんですね。ごく普通のサラリーマンの妻という感じだったんですけど、たまたま自分の住む環境に、アイヌ文化がいっぱいあったということもありましたし、自分は本当に恵まれた環境の中にあって本当に良かった。で、それを周りの皆や、やりたい人達にどんどん教えていきたいし広めていきたいというのがありますね”